2Ka-8　　戸建住宅地における窓からの眺望に対する居住者の意識に関する調査研究

○亀井靖子　西村一朗
(*奈良女大・院、**奈良女大)

【目的】窓は建物の内と外とを結ぶ役割を持ち、建物の内部にいる人に対して様々な心理的効果を与えている。そのため、快適な住生活を営むためには窓からの眺望が居住者にとってできるだけ快適であることが望ましい。しかし、戸建住宅地の景観において、窓からの眺望を考慮されることはほとんどない。本研究では、窓の役割と効果を明らかにすると同時に、戸建住宅地における居住者の窓からの眺望に対する意識を明らかにすることを目的とする。

【方法】戸建住宅地において、居住者に対する留置自記式のアンケート調査を行った。調査対象地は奈良市青山と城陽市寺田今堀を選定した。調査時期は平成9年 11月。調査対象戸数は512戸、有効回収数は401票で、有効回収率は78.3%である。

【結果】調査結果から住宅に窓を設置する際に約6割の人が窓からの眺望に配慮すべきと考えており、7割以上の人が窓による効果として視覚的な効果を重要視していた。窓からの眺望として「家並み」や「街並み」に対して評価が低かったことから、街並みを総合的にみると評価が低いことが分かる。また「緑」に評価が集中したにも関わらず「公園」に対しては評価が低かったことから公園に緑が少ないことが予想され、「並木道」が見えたら理想的と考える人が多かったことから公園や道に緑を増やす必要があることが示唆される。窓からの眺望に対する要求は隣戸間隔の確保や公園や道の緑化などが多く、半数以上の人が周囲に対する何らかの要求をもっていることが明らかになった。また窓からの眺望の対する関心が高いほど周辺の環境に対する関心も高いことが明らかになった。以上のことから、今後の戸建住宅地のあり方として、窓からの眺望という視点からも環境整備をする必要があると考える。